

埼玉県マスコット「コバトン」

令和8年産（令和7年播種）

麦類の作柄概況



令和8年7月

埼玉県農業技術研究センター

1 気象概況

（1）気温

平均気温は、11月から1月まで平年並であり、2月から5月まではかなり高く経過し、6月は平年より低かった。特に2月は観測史上第1位、4月は第3位、5月は第2位の高温であった。

（2）降水量

6月が平年よりかなり多かったほかは平年並から少なく経過した。

（3）日照時間

2月、4月、6月は平年より少なかったほかは平年並から多く経過した。

（4）熊谷地方気象台の観測記録

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
平均気温 (°C)	本年	12.0	7.0	4.4	7.2	10.5	16.0	20.5	22.1
	平年	11.7	6.5	4.3	5.1	8.6	13.9	18.8	22.3
	平年差	+0.3	+0.5	+0.1	+2.1	+1.9	+2.1	+1.7	-0.2
	階級区分	平年並	平年並	平年並	かなり高い	かなり高い	かなり高い	かなり高い	低い
降水量 (mm)	本年	6.0	13.0	1.5	26.5	78.0	87.0	69.0	275.0
	平年	53.5	30.9	36.5	32.3	69.0	90.7	115.1	149.5
	平年比	11%	42%	4%	82%	113%	96%	60%	184%
	階級区分	かなり少ない	少ない	少ない	平年並	平年並	平年並	少ない	かなり多い
日照時間 (h)	本年	193.9	210.7	250.4	190.5	208.1	175.6	237.1	107.3
	平年	171.6	200.9	217.0	199.8	203.2	197.1	192.0	133.9
	平年比	113%	105%	115%	95%	102%	89%	123%	80%
	階級区分	多い	平年並	多い	少ない	平年並	少ない	多い	少ない

＊熊谷地方気象台「埼玉県の気象・地震概況」より

(5) 特徴的な気象と麦類への影響

特徴的な気象	麦類への影響
11月から2月までの寡雨	出芽遅延、生育抑制
2月から5月の高温	生育促進、登熟前進
3月、4月の定期的な降雨	生育促進、適正な登熟促進、遅発茎の発生助長、赤かび病の発生助長
5月、6月のまとまった降雨	倒伏の発生、品質低下

2 作柄概況

(1) 当センター内 生育相調査結果（表2、表3、図1 参照）

ア 小麦（さとのそら：11月25日播種）

播種時の土壌は適湿であり、碎土は良好であった。出芽期、出芽までの日数は平年（令和2～6年播種の5か年平均）並となった。苗立率は93%とおおむね平年並であり、苗立数は平年比99%の146本/㎡確保された。

播種後、1月までの平均気温が平年並に経過し、ほとんど降雨のない状態であったものの、草丈、茎数ともに平年並に推移した。2月以降の高温傾向と定期的な降雨により、生育が前進し、弱小茎の夭折も早まった。また、幼穂の分化は平年より前進し、幼穂長の伸長速度は平年より早く、茎立期は平年より4日早まり、出穂期は平年より3日早まった。

出穂期以降も高温傾向となり、5月上中旬は多照傾向であったため、成熟期は平年より3日早まった。成熟期調査では、穂長、穂数はおおむね平年並となった。

全穂数から穂長が短い弱小穂等を除いた有効穂数は平年並であった。3月上旬の多照傾向により、1穂粒数が平年比103%、㎡当粒数は平年比104%となった。登熟日数は平年並であったが、登熟期間前半の多照傾向によって千粒重は平年比106%、整粒重は平年比103%（715 kg/10a）となった。外観品質は粒形、光沢ともに問題なく、おおむね良好となった。

イ 大麦（ニューサチホゴールデン：11月25日播種）

播種時の土壌は適湿であり、碎土は良好であった。出芽期は平年（令和5、6年播種の2か年平均）より1日遅く、苗立率は100%と平年を上回り、苗立数は127本/㎡確保された。

播種後、1月まで平均気温は平年並に経過し、降雨もほとんどなかったことから生育は緩慢であった。草丈の伸長、茎数増加、葉位の進展いずれも平年より遅れ、この傾向は2月まで続いた。しかし、3月の高温と降雨によって肥料吸収が促進されたことにより遅発茎の発生が助長され、3月

下旬には弱小茎の夭折が急速に進んだ。また、莖立期は平年並となったが、高温により生育は前進し、出穂期は4日早まった。

5月1日以降の定期的な降雨により倒伏が発生したものの、倒伏程度は1.3（0～5の6段階：傾きの程度と面積割合で評価）と平年より軽度であった。このため、倒伏による登熟への影響は平年より小さく、登熟期間前半は高温に経過したことにより、成熟期は平年より5日早く、登熟日数は1日早まった。成熟期調査では、稈長はおおむね平年並、穂数は平年比97%とやや少なく、穂長は平年比109%と長くなった。

有効穂数は平年比91%と少なかった一方、1穂粒数は平年比104%と増加し、 m^2 当粒数は平年比95%となった。登熟期間前半の多照傾向や m^2 当粒数が少なかったことから、千粒重は平年比113%と重く、精子実重は平年比112%となった。さらに、整粒歩合が平年より12.6ポイント高まったことから、整粒重は平年比129%（760 kg/10 a）となった。

外観品質は、光沢がやや弱いものの、粒張りは問題なく、おおむね良好となった。

（2）県内全般

ア 播種作業

播種作業進捗状況は、暖冬傾向の中で早播きを避けることが浸透したことから11月19日現在で平年よりも遅れていたが（R7/平年、大麦：21.6%/50.8%、小麦：14.9%/42.4%）、11月に入ってまとまった降雨が無かったことから、播種作業開始後は順調に作業が進み（同、大麦：89.2%/89.8%、小麦：63.8%/80.7% 12月3日現在）、大麦では12月上旬、小麦では12月中旬におおむね終了した。（農業支援課調べ 平年は過去5年平均）。

イ 生育状況

11月播種（適期播種）のほ場では、出芽苗立ちが良好で、初期生育は順調であった。12月播種（晩播）のほ場では、降水量が少ないため土壌水分が低く、出芽に時間を要するなど初期生育は緩慢であった。

播種適期の11月末までに播種されたほ場の面積割合は、大麦で9割（平年並）であったが小麦では6割（平年比8割）に留まった。播種後の気温は平年並であったものの、降水量が少なかったことから、初期生育は平年並～やや遅れた。

1月には、適期播種されたほ場では2回目の麦踏みが行われたが、晩播ほ場でもおおむね麦踏みが可能な生育状況となった。

2月の平均気温はかなり高かったが、11月以降少雨傾向が継続していたことから、肥料吸収が遅れ、生育量、特に分けつの発生が遅れた。2月末にまとまった降雨があったことから、適期播種されたほ場ではおおむね必要な茎数を確保できた。しかし、晩播ほ場では茎数が少なかった。

3月は気温がかなり高く、降水量が平年並になったことから生育が急速に促進され、葉色が濃く、やや軟弱傾向の生育となった。

適期播種されたほ場の茎立期は平年と比較して、大麦では3～5日早い2月末、小麦では2～3日早い3月中旬から始まった。晩播ほ場では適期播種ほ場と比較して1～2週間生育が遅れた。

出穂期は平年と比較して大麦で4～5日早い3月下旬、小麦で2～4日早い4月上旬から始まった。麦が急速に伸長する茎立期から出穂期にかけて、気温が高く降水量が平年並みにあったことから、残存した基肥と施用された追肥の影響で葉色の濃いほ場が各地で見られた。2月中旬まで降水量が少なかったことから穂数が少なく、遅れ穂の発生は比較的少なかったことから有効茎歩合の高い生育となった。

登熟期間の5月は、高温・少雨となり急速な強制登熟により成熟期も早まった。成熟～収穫期の6月3日に台風6号の接近により県内の広い範囲で100 mm以上の大雨となった。また、6月7日（平年6月7日）の梅雨入り後は、近年になく梅雨らしい梅雨となり、特に6月下旬は台風7、8号に刺激された梅雨前線の影響で降雨日が多く、収穫作業に影響を及ぼした。

大麦の成熟期は平年と比較して5日程度早まり、収穫は5月13日頃から始まった。5月27日現在で43.1%（同66.1%）、6月10日現在で98.5%（同98.6%）となり、6月中旬におおむね終了した。大麦のうち、熟期の早いビール大麦は、おおむね台風前に収穫を終えることができたが、六条大麦は台風の影響により一部で倒伏が見られた。小麦の成熟期は平年と比較して3日程度早まり、収穫は5月末から始まった。6月10日現在で42.1%（同62.5%）、6月24日現在では94.4%（同99.0%）と降雨のため収穫作業はやや遅れたが、6月末にはおおむね終了した（農業支援課調べ 平年は過去5年平均）。

収量・品質は、登熟期の高温乾燥による強制登熟により細粒の多発が懸念されたが、穂数はやや少なかったものの基肥窒素の肥効が追肥時期まで継続したことから、千粒重と容積重が重く、整粒歩合の高い多収型の登熟となったと考えられる。現地でも、各麦種とも収量・品質が良好と見られている。

ウ 病害

穂数が少ないものの葉色が濃く、降雨が定期的にあったことからうどんこ病や赤さび病の発生が目立った。

赤かび病は、本年も小麦が最も感染しやすい開花期とムギ類赤かび病菌子のう胞子飛散好適日がおおむね一致し、子のう胞子飛散好適日が多く出現したことから【令和8年度病害虫発生予察注意報第1号「ムギ類赤かび病」】が4月27日に発表された。また、穂ばらみ期から開花期の低温遭遇による障害が懸念されたが、凍霜害の発生が軽微であったことと、出穂後高温乾燥傾向に推移したため赤かび病の発生はほとんど見られなかった。

気温の変動により出穂時期が前後する中で、防除適期を確実に予測し、効率的な防除計画を樹立するために、農業技術研究センターが開発した農作物発育予測アプリ「咲き玉くん」が活用された。県内全域で航空防除時期の調整が行われたことにより赤かび病の適期防除が実現し、農産物検査において赤かび病が原因で規格外となったものは見られなかった。



農作物発育予測
アプリ「咲き玉くん」

表 1 耕種概要

播種様式	条間 (cm)	麦種	品種名	播種期(月日)		播種量 (kg/10a)	施肥量(N:kg/10a)	
				本年	平年比		基肥	追肥
シーダーテープ	30	小麦	さとのそら	11月25日	11月25日	6.0	6.0	4.0
		二条大麦	ニューサチホゴールド	11月25日	11月24日	6.0	7.0	2.0

注 1. さとのそらは令和 2～6 年播種の 5 か年平均、ニューサチホゴールドは令和 2、3 年播種の 2 か年平均との比較（以下同様）。

注 2. 追肥時期 「さとのそら」：出穂 14 日前、「ニューサチホゴールド」：莖立期。

表 2 生育調査

品種名		出芽期 (月日)	苗立数 (本/㎡)	苗立率 (%)	莖立期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	成熟期調査			倒伏 程度
								稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	
さとのそら	本年	12.8	146	93	3.11	4.8	5.27	82.8	8.9	584	0.0
	平年	12.8	148	92	3.15	4.11	5.30	82.4	8.7	583	0.0
	平年比(差)	0	99	1	-4	-3	-3	101	103	100	0.0
ニューサチホ ゴールド	本年	12.8	127	100	3.2	4.1	5.13	96.7	7.0	778	1.3
	平年	12.7	122	97	3.2	4.5	5.18	98.3	6.4	799	2.7
	平年比(差)	1	105	3	0	-4	-5	98	109	97	-1.4

注 1. 平年比は％（以下同様）。

注 2. 倒伏程度は 0～5 の 6 段階評価

表 3 収量及び収量構成要素

品種		精子 実重	整粒 歩合	整粒重	有効 穂数	1穂 粒数	㎡当 粒数	千粒重	容積重
		(kg/10a)	(%)	(kg/10a)	(本/㎡)	(粒)	(千粒)	(g)	(g/L)
さとのそら	本年	715	99.9	715	579	31.7	18.4	42.5	847
	平年	699	99.7	697	578	30.9	17.7	40.1	834
	平年比(差)	102	0.2	103	100	103	104	106	102
ニューサチホ ゴールド	本年	793	95.8	760	709	22.8	16.1	55.1	759
	平年	708	83.3	591	777	21.9	17.0	48.9	735
	平年比(差)	112	12.6	129	91	104	95	113	103

注 1. 精子実重は風選により屑麦を除いた重量、整粒重は篩選(小麦 2.0 mm、ビール大麦 2.5 mm)後の重量。

注 2. 整粒歩合は、篩選(小麦 2.0 mm、ビール大麦 2.5 mm)による。

注 3. 精子実重、整粒重、千粒重、容積重は水分換算値(小麦 12.5%、大麦 13.0%)。

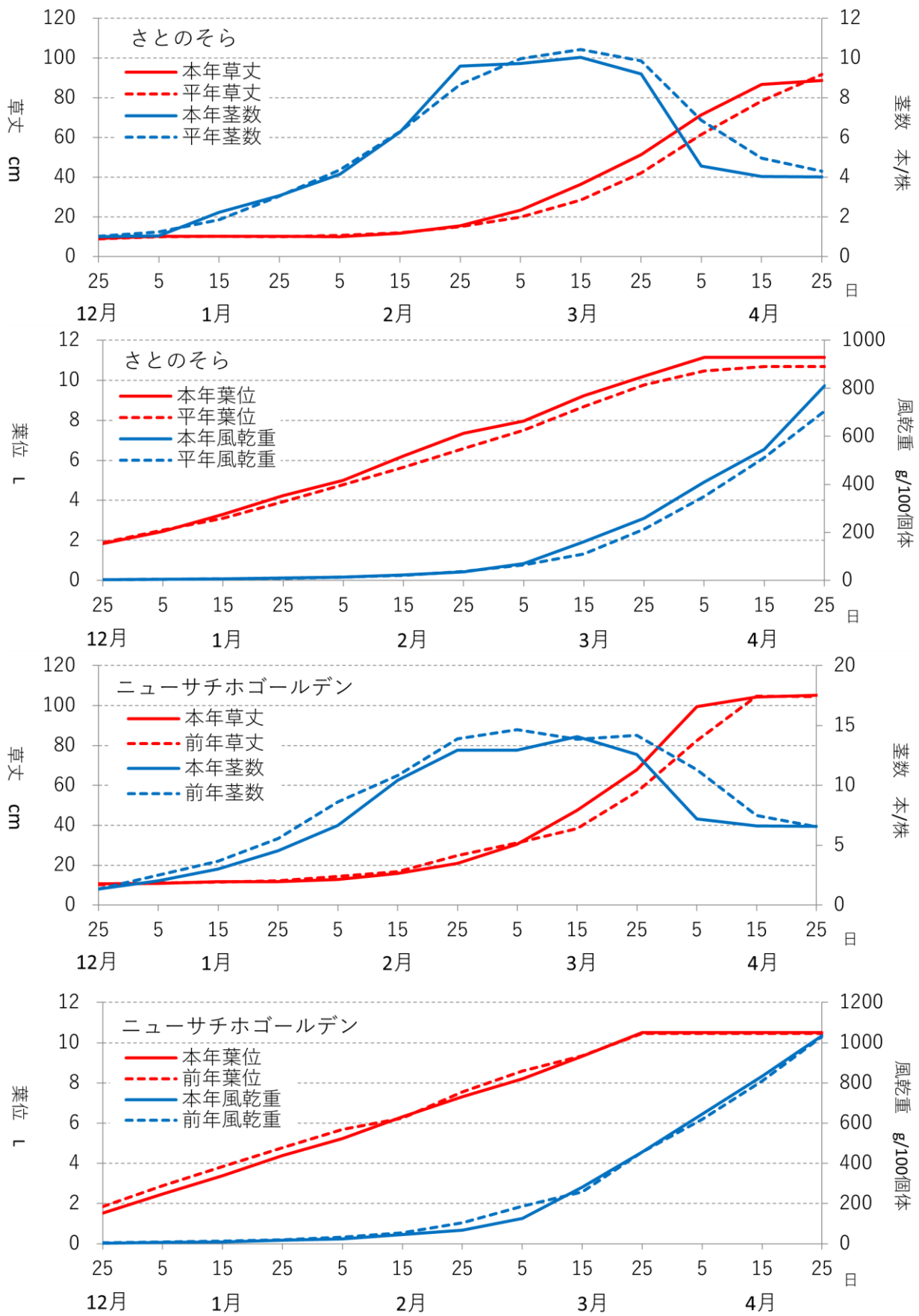


図1 生育経過

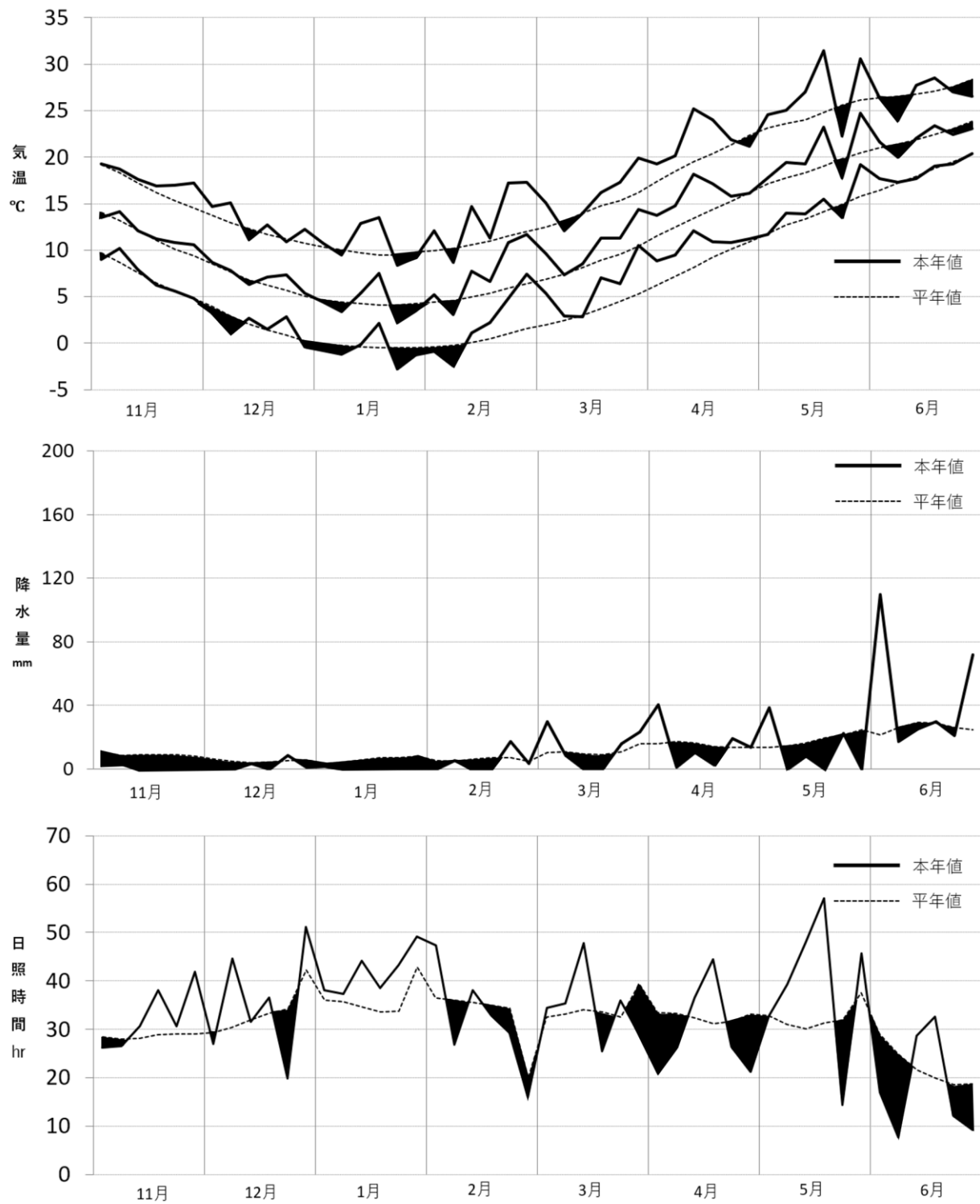


図2 令和8年産(令和7年播)冬作期間気象図
(熊谷地方気象台日別データより作成)